

資料紹介

日本語編集委員会編『ブラジル沖縄県人移民史
——笠戸丸から90年——』ブラジル沖縄県人会
会 2000年 550ページ

ブラジルの日系社会は、混血や出稼ぎなどさまざまな理由によって、コミュニティとしてのまとまりやアイデンティティを急速に失いつつある。そうしたなかにあって沖縄県からの移住者やその子孫は日本人としてよりも沖縄県人としての意識をもちつけ、その文化を継承している。本書は沖縄県人のブラジルでの90年にわたる移住の歴史を綴ったものであり、笠戸丸での移住から現在にいたるブラジル社会での沖縄県人の生活、精神世界が詳細な記録をもとに記述されている。

移住の歴史は決して平坦なものではなかった。沖縄は、明治以降日本の植民地政策・皇民化教育を受け、移住者はブラジル日系社会のなかでも差別を受けてきた。差別は反動として良き皇民となるという心性を生み出した。それは彼らの天皇絶対、皇軍不敗の観念を強め、第二次大戦後ブラジル日系社会を巻き込んだ日本の敗戦を信じない勝ち組と、敗戦を事実として受け入れる負け組との抗争を沖縄県移住者の間で深刻化させるという事態を生んだ。本書は、こうした不幸な歴史の一方で独自の文化を維持しながら国家を超えて開かれた海域に生きてきた沖縄の人々の国際性をも描き出している。ウチナーンチュ（海を越える）、開かれた人的ネットワークはブラジルでも形づくられている。本書は、単に移民史としてだけではなく、日本の歴史を後世にどう伝えるか、

国際化とは何かを考えるうえでも一読に値する。

（小池洋一）

中川和彦著『ラテンアメリカ法の基盤』千倉書房
2000年 341+12ページ

ラテンアメリカを研究対象とするものにとって困惑の種の一つが、制度としての法と現実の適用の間にしばしば乖離が存在することである。本書はその背景として、宗主国スペインのカステージャ法が新大陸においてインディアス法として適用された経緯を指摘する。現在のラテンアメリカ法の基盤はインディアス法であるが、そのもととなった本国のカステージャ法をさらにたどればローマ法に行きつくとして、本書ではローマ法時代からのイベリア半島の占領の歴史とそれによる法体系の変遷を整理する。

詳細な歴史記述は非常に興味深いものの、本書の大半がローマ法からカステージャ法の時代にあてられており、ラテンアメリカ法そのものに関する解説が少なく、また植民時代初期に限られていることが残念である。

（坂口安紀）

岡本哲史著『衰退のレギュレーション』新評論
2000年 530ページ

本書の特徴として、日本人による初めての本格的なナチ経済史の研究書であるという点と、分析の手法にレギュレーション理論を導入した点が指摘できる。第Ⅰ編では途上国経済分析理論としてのレギュラシ

オン理論の優位性に触れた後、1830年から1914年までのチリ経済についてレギュラシオン理論を念頭に置いて概観している。ここではそれを外向的蓄積体制と規定し、その蓄積体制自体に、またそれを構成する賃労働関係等の諸制度の中にも相対的衰退化の兆しが存在していることを指摘している。

第Ⅱ編では通貨・金融レジームが扱われ、金銀複本位制の形成と確立、および1878年金融恐慌を契機とした不換銀行券・政府紙幣制度への転換が語られている。第Ⅲ編では銅・硝石など鉱山企業を事例として取り上げ、競争形態の分析としている。本書はレギュラシオン理論の中に「安定した低成長」をもたらし「衰退のレギュラシオン」という概念を導入したことが独創的であるし、第Ⅱ、Ⅲ編は実証的経済史研究としても優れている。

(宇佐見耕一)

歴史的記憶の回復プロジェクト編 (飯島みどり・狐崎知己・新川志保子訳)『グアテマラ虐殺の記憶——真実と和解を求めて——』岩波書店 2000年 254ページ

グアテマラは人口の80%が貧困層に区分され、しかもその大部分が先住民で占められている。歴史的、構造的なこの不平等問題を抱えるグアテマラ社会で、36年もの間、国家的ジェノサイドが繰り返されてきた。1960年代に軍事政権に対抗する形で左翼ゲリラが出現すると、国家が共産勢力の駆逐を名目に、大規模な人権弾圧を繰り返したからである。そのな

かで集団虐殺、家族の殺害や失踪、拷問、強制徴兵など想像を絶する人権侵害が行なわれ、残された犠牲者たちは深い心の傷を負った。本書はカトリック教会が中心となり、長く沈黙を強いられてきた人権侵害被害者の証言を収集した「歴史的記憶の回復プロジェクト」の調査結果報告書である。6000件にのぼる生の証言は全国のカトリック司教区が協力する形で、「アニマドールス＝勇気づける人々」と呼ばれる650人の調査員によって収集されたものである。グアテマラは多言語国家で、公用語であるスペイン語の他、マヤ系の21の言語を含む総計24の言語が話されているが、証言の61%はマヤの15言語によって語られたものである。それをスペイン語に翻訳し、一本化するという形でスペイン語版が編集された。証言によって紛争の真実を明らかにし、この痛ましい歴史的事実が忘却されず、正しい歴史認識による社会再生の道が開かれること、それがこの本の狙いとするところであろう。なお、日本語版の出版は同国の事情に精通した3人の中米専門家によって可能となったものである。これにより日本の読者がこの貴重な歴史的証言集にアクセスすることが可能となった。

(村井友子)

谷浦妙子著『メキシコの産業発展——立地・政策・組織——』（研究双書509）アジア経済研究所
2000年 362ページ

メキシコの自動車産業、電機電子産業、保税加工産業の分析で数多くの業績を上げる著者の、研究の集大成といえる著作である。クルグマンの集積の経済学を援用して、輸入代替工業化から輸出指向工業化へのメキシコ政府の政策転換、国際的な企業間競争の激化やNAFTAの発足といった国際経済環境の変化に対応して、メキシコの上記三つの産業立地や企業間取引、産業組織にどのような変化が起きたのかを分析している。結論を整理すれば次のとおりとなろう。第1に、新しい国際分業体制の下でメキシコは低賃金を強みとする低付加価値製品の生産地に再編されつつある。しかし国際競争力欠如のために、そこにメキシコの原材料・部品部門が参入する余地は小さい。第2に、産業組織の変化として、国境の障壁が取り除かれたことで完成品組立と部品製造の柔軟な企業間ネットワークが形成されつつある。ごく一部のメキシコの部品製造企業は先進国企業と組むことで、この企業間ネットワークへの参入を果たし成長している。第3に、産業立地への影響としては、新しい分業体制の下ではメキシコ国内に部品産業の集積は望めない。また、産業の北部国境沿いへの移動が急速に進んでいる。長年にわたる著者の著積を反映して、三つの産業について豊富な情報を盛り込んだ著作となっている。

（星野妙子）

天理大学アメリカス学会編「アメリカからアメリカスへ——欧米という発想を超えて——」創元社 2000年 222ページ

本書は、南北アメリカを一つにまとめて考えようという発想の下に1996年に創立された、天理大学アメリカス学会の学会誌第1号の性格を持つ単行書といえる。執筆するのは天理大学のアメリカ、ラテンアメリカ研究者ならびに上記の発想に共鳴する学外の研究者である。2部構成から成り、第1部には「アメリカス宣言」と題して南北アメリカないしはアメリカ合衆国という単位で、地域全体に関わるテーマを扱った論文が、第2部には「アメリカス世界の諸相」のタイトルで時代、地域、問題領域を特定化した論文が並ぶ。アメリカ合衆国とラテンアメリカを分析対象とした論文が共に収められているという意味で、冒頭に述べた発想は本の構成に体现されているといえよう。ただし各論の叙述においてこのような発想が実を結んでいるかといえば、必ずしも成功していないとの感想を持った。とはいえ学会の初めての成果であることもあり、そこまで望むのは過大かもしれない。南北アメリカの研究者が集う貴重な場が形成されたメリットを生かして、独創的な第2号が現れることを、大いに期待したい。

（星野妙子）